特71
658

佛國エトセトラ又はエトセトラ原著

本陰遊花寅水合譯

情の態

言語人

七癖

著者孤

東京 稻垣堂

く何とおく卑賤氣よ見へ帽をも脱ず傲然と主人の老母が卧床とは聊か隔り場所よ立會釋もおさて携へし杖の頭を噛て居ぬ這時主人の制昆班は少しく憤悶たる狀況よて貴君は那邊の誰おるぞ人の家居よ案内もなく入来りしは無禮おりと打咎むれば彼士官は纔よ帽に手を掲て老婆よ對ひ和身は什麼馬理依達厚勞壞の母御制昆班どのに在をる乎初て對面敬申すと最尊大に挨拶すれば制昆班は黙おり妾に御尋の制昆班なるが貴君は亦何用ありて来ませしぞと問返さまて客人は暴を左右よ捻り廻し先早内儀と云かけるを老母は忽地消打して妾は内儀と嘆まうさず制昆班と云

名に侍りと記破らるて件の人に興を醒せし面色
るて然らに刺昆班姑御前よ右之左之光る咱身分
を詳細る告て然る後要の次第を説出んと云る老
婆に打点頭丹にも貴君の随意あまと應を聞て
後又彼の軍人に説出やう我濟に指令官士魯撒と
云つゝ故と是見よがしる緋の紐付紐を拈りあが
ら今に非職るあれども戦ひの場る臨し綟二十
餘叩疵きへ十箇所負ひたりしと鼻高々と語り出
し老婆の方を屢々見れど老婆に毫も感ずる体を
く丹を妻が知る綟かに而其後に問懸れば我們
に巴黎ゆ貴紳る知己親戚甚多く其人々に誰彼も
皆公侯伯子男の爵ありと得意顔る述るを聞老婆

に鼻るて挨拶ひ其等の事に甚麼ある共妻の利益
る成る事あらずと事も無氣る説欲すを耳るも彼
けず又語を繼ぎ我儕に家る馬を蓄ひ又二輪車の
馬車を所有り且夫年々我家の入費を算る少く
も一万圓を超過ぬに無しと最誇り氣る辨ぜれば
此時老婆に太息を吻き今聞く貴君の活計るに打
て愛りし妻母子に日々漸く得るとあるも二十錢
内外るて其れを麵包るも衣類るも代ふるる在
ば足らぬ勝ち平均して積算て見ま ば半分に餓も
来へもして送り辭たる日を送るも持て生れた運不
運これが浮世の正道乎と歎息做るを打聞て彼の
指令官士魯撒に首を左右る打掘つ否々決して正

道をらす夫故我儕が今日態々和女の家に訪来りしも平竟これを矯正さんと思ふよりの事おりかしと傲然として説示せば老婆は忽地氣色を變へ貴君の此家へ来給ひしは妾が貴君に愚弄らるゝ罪も報ひも無きものを早速く出て行たまへ咄忌々しと呟けば然お性急よ怒り給ひぞ何とて和女を愚弄らんとて此所まで態々来る可き所は推測にも知れたる詰柄我儕が此家へ来りしは全く和女の利益おるに疑いれて最辛し兎に角にも意中を語げて和女の意見を聽くとせん刺昆班姑よ和女は富貴を好まざる如き我説に隨ひおば和女は美麗き家に住居婢

女に侍冊らを朝はコウヒー午食晩餐は珍味佳肴に腹を飽らしめ尚且夫に月々に二十五圓の小費を得る身と成らんが甚麼ぞや餘り惡らも有るまじと利益を餌食に誘引ふとは知るか白髮の刺昆班は不審氣に眉根を擇せ弁は心得ぬおとを説いるゝものかな若や真實おらんにはあらずと輕忽とは叶はぬ苦慈善の心で爲るに上らぬ年齢の効弁は論ふまでも無きおとおり夫も是も結局るところは彼は愛らし紀眼瞼ゆゑと聞いて彌増不審氣に其の眼瞼とは甚の緯と問へで莞爾と打笑ひ弁は他おらず和女の養女と聞いて老婆は呆るゝ迄に愕きたる面色にて答へも爲

きず彼客の面を目瞻て居たりしが叔は養女を知り給ふまやと問へば彼方は点頭つゝ元来我儕は最上の麻布の襦袢の其外は用ゐぬ故まゝ平生日頃丹を如爾但許へ注文都度和女の養女を見たりしが實に絶世の佳人まして又比類無き姿容に愛でて云ふを老婆は引取て夫故養女を包畜ん爲態くて此家へ来ませしかと聞いて小勝を嗜あり老母より和女の才智は驚りあり才談話いまだ半途まゝ至らで速全體の意を推せりぎるよりは爭て斯く悟り得ん只是至妙ある者まゝ非くのを斯く才氣ある和女擘まゝ詩々く語は妙と云はまゝけれど已まゝ和女の覺りし如く我儕の意中は然ぞ

かし說ては我儕が心算を和女まゝ概略語る可し先づ一軒れ美室を設け談室まゝ和女と彼兒を住居は一せ月々二百圓の手當の外まゝ婢女一個まゝ料理人一個を添るとせん且は當座の衣裳調度外に支度料として五百圓亦折々の物好みは談兒が我への仕向まゝ因る這は是れ平常の取定にて物見遊山は此外あり徳る祭礼は通常の者の及びも付らぬ絆を老母甚麼氣は無紀やと鼻蠢るして說誘れば老婆は漸ら笑片向げ這は願ふても撰き洪福なる誰か不の字を說は可き緩ゞて貪まゝ苦む身の弱年ければ身を舍ぎ老年ては他人の身を沽るも窮貴の爲まゝ怪しうはあらしと聞いて悅ぶ似非單

人に事もや已まず調ぬと思へば最笑まし氣に老婆
まず判ひ和女まず然せる意思あらば彼兒の上も懸念
にあらじ然あらば我儕も奮發で和女の煙草の料
として月々三十圓を進せんと館迄利を以て誘引
へば老婆は數回うち点頭爾あらんには頂上おし
其まま就ても思ひ起す今朝も養女と談話の折
養女が仕立まず懸りしに或る外妾の所有社よしに
て百五十圓の價ある襦袢にて併りしが其の襦袢
を呉ば着る女は甚廣ある人か知らねども此方の養
女馬理依達も尋常の標致ある上婦人の道には一
つとして欠た所は無きものを其者は終日戯縫お
し得るに僅々まず二十錢世は千差萬別のものおり

と云ふて果敢無み併りしと問はゞ語りまず聞耳立
て其百五十圓の襦袢とそ我儕が紹みたるものお
れ開は我儕が最懇親疎紀華族系的郎氏の愛妾阿麻
呂丁の依頼まず元来此女は「コルベン」街の貧窮き
者の女兒おるを桑的郎氏まず見出され僅々三年過
ぬ間まず巴黎まず有名女とおれり和女が養女も亦そ
の如く早晩徒る身柄とおり以前は其身が仕立た
る百五十圓の襦袢を着る身まず成り代るも眼前り
和女も然こそ滿足おらんと最誘り顔に說紀示せ
ば老婆は太き息を吻き聞くが如く〳〵其女兒も最
と悶然の者まず併り願はくは養女馬理依達も同じ
貧しき者おから徒る事等線き様まて祭まず相違の

老婆の言語に老母其に又何故に と問ふに刺昆班に何故とは知らざりと云ふに益々打驚き何故彼人が盗賊して有るまじきと詰るを老婆は恭然と然らば盗賊こそ盗賊あれと云ふ

初の間こそ黄金もて造れる山を令取あるとと分に過ぎたる約束して他人の心を欺かばせ期に望めば借家が極度僅々三月乎二月を過きぬ内に捨られて一文無しと成るは必定然すれば甲斐なき婦人の身の爾後甚度とある可き哉を憂苦に命も絶えもせんと軽賤る心は将来を危懼ふ老婆の要心と察して一層傲然と然る懸念は人に寄る和女は我儕を何とか視る現今は非職に在りつれど二十

餘度の戦場にて十箇所の疵を負ひ已衆に所在將校とは彼我同輩の交際あり一年々一万圓餘を出費す身あるを然でも猶和女は危懼ひ思ふるや察をるところ安楷の爲前金おどの望おらん若し然もあらば打明けて疾く云へと語るべよき老母和女に異存あくば明日にも和女の名義もて家作を購ひ求むとせん然れ雑作修繕に一週間餘に懸る可し先づ夫迄の手當として三百圓は此通りと云ひつゝ胴着の懐中を探、捜り取出したる金貨の員數は三十餘り二ツ三ツ何に卧床の傍なる敷縫卓子に置排べて老婆に對ひ奈何母這金貨を和女は欲しと思はぬ乎と指も

てそれと指示す燦爛たる金貨は光軍は老婆は忽然我を忘れ身を乗り出し凝視しが遂は是迄見しこと無き金貨の光輝は眩迷しつゝ懸て一個を掌は取り上げ打返々々餘念無氣は戯弄ぶ斯の狀況を見渡しつゝ彼客人は仕濟たりと笑を帶び尚も老婆が爲る樣を如何あらんと伺ふに老婆は頻て一個宛件の金貨を積累ね斯れほど有らば安樂は五月は生活さる可しと吐息と共は說出せば時分は好と蔣出和女の胸中一つにて月々如願仕送らん奈何孫引給はゞと金貨を拵は問ひ懸けまゝ老婆は何とか敢たりけん頭を垂れて稍少時黙然として居たりしが漸くは頷て面を擡げ數は も足

らぬ養ひ嬢女を斯程執心做たまふは最喜ばしく思ふにつけ貴君の如き身柄は此程の金貨何はかせん養女を憫然む御心有らば我々母子は給はれかしと聞いて此方は直と呆れ開たる口も閉ぬ間は老婆は俄も愴然げは斯程の金額は も貴君は取りては虚あらんが妾母子の身は取りては暫く樂に生活るのみか差當る負債を片付劃合好た仕事を待つ間も有らん其上久後安樂はもおらば是皆貴君の賜ものあり御恩は永く忘れはせじと最衰れ氣はいふをきい士魯撥は心の中は此愚婆奴が何をかいふ我を白痴はせん爲かと完然は憤ふれど故意と笑ひは紛らして呼阿母の眞面目

戒言は不言も欲得和身は咱儕を似非聖人或は慈善會員の幹事等と謬見ふて乎倘如左愚者あるもせば三百圓の大金を施與す徒もありもせめ一疑、普通の人間は如斯僻事做べき歟馬鹿々々しゝと咬けば刺昆班は遠時しも心裡に思やう咱身貧縷まし苦しめば心も自然と野鄙なり無果敢希望を抱きしは噫、咱をがら愚おとりなかりきと自己が非を悟るものから片意地ある老婆は方僅士魯撤が言し過言を憤怒れど故意と言語を卑下して是は妾が惡かりし怨し給へと賠諾は士魯撤は傲然と其賠諾は要お充おと丹は兎も角も刺昆班ぬし遠首まは並べし此金の落着方は什麼とせん和身が

倘も不の字を言はゝ再回懐中に納るゝ迄と手を差伸て拿らんとするを咄嗟とばかり刺昆班は士魯撤に打向ひ先待給へ尚暫時金貨は素来貴君の品縦や其場に措給ふも妾が拿て食もせにと制止めて凹らかる眼を光らしつ件の金貨を穴あくばかり凝視は士魯撤は左もこそと云ぬ計の面色にて丹を食べるも食べぬも和身の意中一にあり願ふは夫を云さしたる言葉を打消し眼を剝出し貴君は黄金を餌とし妾を釣て馬理依達を靡す心で在さんが丹は遂がた希望ぞかし元来婦道を守り貞操堅固の性質おれば自身が心に許したる其人にも卒不知貴君の如き人物の

心に從ふ東西あらず彼は彼の意見あり親として自由なる絆かはと眼は金貨を放れども言放ちた一言は日頃の氣質より似氣もおく正當議論の士督撤は辟易せしが慈ずまた什麼馬理依達嬢の行ひは孫て如爾但姑御より聽つる故に左もありを一体和身の娘子は孝心篤き性質なし て如何なる和身が無理難題も背く絆をく從ふと歌加之も娘子は甚だ絆を恐怖るゝ由左まは這回の一件も悲て和身の隨意を況て不利益の筋あらねば無尋思して見られおるを如し和身等母子の狀況は乞丐等の境界おるを身の洪福とある絆を捨ると

云は甚麼絆ぞ縱や娘は不承知ても其處は和身が親甲斐に威光を以て往生きも怪しうはあらぬ絆ぞかし 开をしも強て固辭まおば反て娘の爲おらど喻言も云ふ小食と又破爪の小娘は紫外に油斷おらず娘子とても左の如く早晩同輩の職人に唆きて憂目や見んと嫌しつ脅しつ勸諭せど老婆は動く氣色もおくおるほど世に仰の如き姪弃多情の娘子が隨分おれに侍らねど妾が娘馬理依達は斯、る振舞すべうもあらず余計心配做給ひそと云へば這方は吉打して誰人しも斯は云ふ者の竟に情夫に誤められ親を捨る歟左もおくば貧苦に責られ土娼乎遊女におるは定のこと

夫れ畢竟親達が身の方向を迷はざる故に嬢等の其結果に豫め如此しと述べ果れば刺昆班い士魯撒が傍若無人なる舉動を心中に憤るものから亦眼前の金貨の光に心弱くも云かねて苦惱氣に吐息吻如何にも貴君が宣ふ如く薄命なる嬢等い賀故其身を賣代おし夜毎に更る仇人に數の枕を川竹の流に淪東西もあり又い路傍に停立て往来の人を梓弓引返りていい一宵の春を鬻げる東西も あらん彼是に付考ふれば僉源因に貧より起り不幸不運の徒も出来ぬ倘其金が妾にあらば獨母子の上而已おらを數多の少婦が難儀を救ひさる淺間數身の上と爲きまゝものを情おや咱身も全く

貧苦の身の上後にい覓に馬理依達も例しに浅之ぬ綜おらんと云つゝ尚も士魯撒が飼に出したる黄金を寓目戀々として居たりしが心を偖と拿直し眼を閉て胸中の燃る欲火を押鎮め漸く我に返り ていい憚る事もあらざれば脅苛て客に向ひ貴君も既に云丈の事い不殘云れしおらん妾も應る事だけ惣て應し上からい最早當家に用おき貴君長座い迷惑做侍りぬ何時まで邪魔を做給ふ氣ぞ快く出て往給へと齒に衣きさせず云放ち聽て枕に就に ける遠方い案に相違してサテい和女い不承知ヨナと云ば老婆い口數語ぞ黙おりと一言應ふ是ば士魯撒い押返し愈々以て不承知乎と念を押れ

て点頭のみ老婆は別に應なし詮方盡て士魯撒は然らば金貨を片付んと一箇々々に拿舉て聞えよがしに音さすれば老婆は憤怒の聲ふりたて貴君は如何剛强は貴金を拘て冥府に墮落ん金貨と持おれども刺昆班は娘の身おのれ老早往かずや身貧をば沽んとて養育ては爲ぬぞかし不義の富貴は浮べる雲正道おのれ榮耀を受んより母子共侶依然に飢餓て死をこそ潔よしと罵しる聲の終るや否始終立聞く馬理依達が憤怒の色の面上に顯れ口惜涙に眼を赫らめ開く戸遲しと内に入母の枕に拿撥り母上好ぞ透計と斷り云ふて給はりし生母より彌增る慈愛を何時歟報酬べきと云つゝ背後

を顧回り士魯撒に打向ひ方僅母が稟しゝ如く最早當家に用おき貴君此上長坐を做されては母の病に礙る故願ふは速く歸りてよと患を含て急立れど這方は歸る氣色もなく然は云へ阿孃はと云被もを馬理依達は引拿て妻最前より戸外に在て始終の樣子は聞侍れりと先を越ども尚不鈍然はらば悉便宜好れと云ふを這方は耳まも懸けず貴君が再回云云と說るれば聞て耳持も無益の所爲を做んよりも速に歸りてよ願ひに侍ると切に乞れやむことをえず士魯撒は好ぞ然らば退りおんされば今日より一週間即八日の日限に熟々尋思做給へかし咱名は指令官士魯撒と音に聞え

し東西なるぞ必ず忘れ給ひそよ宿所は如爾但姑が知了居まば彼首へ色好返事してと自己が身勝手打並べ聽て這家を出立けり迹よは從も馬理依達が母の臥床よ尊寄喃母上方僅は彼いやらし死士魯撒が妾の綷を種々と和女よ商議致しを好判然とあのやうに断り云ふて給はりし嬉く侍るると喜悅ぶ顔を老婆は凝視つ嘆息おし汝が志操正しき故富裕の身とはなれぬ而已か朝夕飢よ苦しむはと云ふを娘は慰さめんと母よ對ひて甚度綷か云んとするを押止無益の綷を云ずもあれ妾は汝の義務をおしは汝は義務を爲んのみ妾も汝も婦道を守まば早晩好事おからぞやは其乍然

不遠母子共侶息を詰安樂淨土に生れん時夫ぞ母子が念願成就阿那面白やと呟死乍寐返欲して言葉おければ馬理依達もめし母よ爲る品々を提籠より拿出鍋よ入れ火爐に开を掛煮あげし上器よ盛て麺包共侶卓の上に排列夕晌の支度も出来あがれば小窓の下よ座を占つ纔よさし込夕日影よ斷々の尺素拿出し窃よ是を打瞻り再回嘆よ沈みけり却記指令官士魯撒は馬理依達が家を出五層の梯子を降おがらサテも今日の出来の悪さ彼の老悖の思ふよ似ず最初の調子と急よ變り理屈詰よ這方の所望を拒みし面憎さ然い云へ娘い強よ我儕を憎うも思ひに爲

殊更老婆の貪欲なる金と聞ては眼のおき性質
凹みし眼を怕明氣に金貨を凝視し様子では彼よ
り商議の捻を返し聽言入来るは必定落力は尚早
不遠素志を遂も爲べ二月立ず彼の娘は巴黎で
有名の婦人とおらん然すれば失費の僅少くて咱
身の榮譽は極りおけん免角細工は仕掛おを悲肝
要のものおりけまと獨語つゝ門邊に出待せし馬
車に飛乘しが咱家へは戻ずして「グレ子ール」街を
志し馬の歩を打早追走らしを来るけまば速くも
其處に到著ぬ此時件の士魯撒は馬車伐停めて車
を降り他しき家の門邊に彳み乎が番守に打對ひ
力査氏は此家に住居ふと聞て来りしが此家に居

る乎甚麼にぞと悲押柄に問掛れば番守は外に立
出然おり件の父子の衆の住所は這里にて候ふお
りし答ふる詞の尾に付て咱濟は子息の路易氏に
聊所要のある者おるが彼人在宿敢給ふ乎と復問
らくれば番守は其人おまば先刻旅より歸り来ま
せしが今は親父も路易氏も在宿おりと告ると聞
然らば路易氏只一個に面會爲度ものおるが親父
に知さず門邊まで喚出してよと頼むにぞ這方は
愛時打案に開は折角の綜おから何分一室の住居
なれば親父に知さず喚出をは只今は些敢がたか
り明日にもおらば左之右之も敢併らんと應ふる
にぞ士魯撒は無爲術自己が宿所を記したる名刺

一葉金出し裏の白紙へ鉛筆もて所用の次第と認め終り金貨四十錢打添つ是はこれ些少の金員なれども和邸を勞する報酬ぞやさる代りまは是なる名刺親父まは内々路易氏に治定と届けて給ひねかしと願めば番守打点頭并び福易紀綱に侍れ御心安く思されよ彼の路易氏が明朝役場まは赴く其時しも必ず渡しまうそべしと快無承引まはぞ然らば直にぜ云捨て士魯撤ぬ匆々まは再度車まは折柴つ家路をさして帰りけり

第五回

貧接の老翁秘まは婚姻を約り
姉寧の少年細まは旅情を說く

不題まは力査父子の起臥しもる閨家の様子を甚鹿

まと云ふまは是も馬理依達母子の東西が住宅と等しき一棟長家五層の上の中央まはて室内まは兩人の臥床あり壁の際まはは父子の者の衣服調度を納め置革匣と別まは何やらん入たる箱の其外には粗造の卓と椅子ある而已紫下一生又說一生代書人力査は平常より早く外店を仕舞咱家へ急ぎ歸りしが折しも恰好息子路易旅行より帰着ぬれば無事の帰宅を折悅び心祝ひの馳走として守日の夕响まは意を用ひ卓の上まは竝べしは薄く爾たる塩豕と四斤餘りの食麵包を白紙の上まは載せ其傍に冷水を盛る一筒の墨子は緻そたる火光の薄暗き燈臺と相對びて立ちたりける這首まは老父力査と對

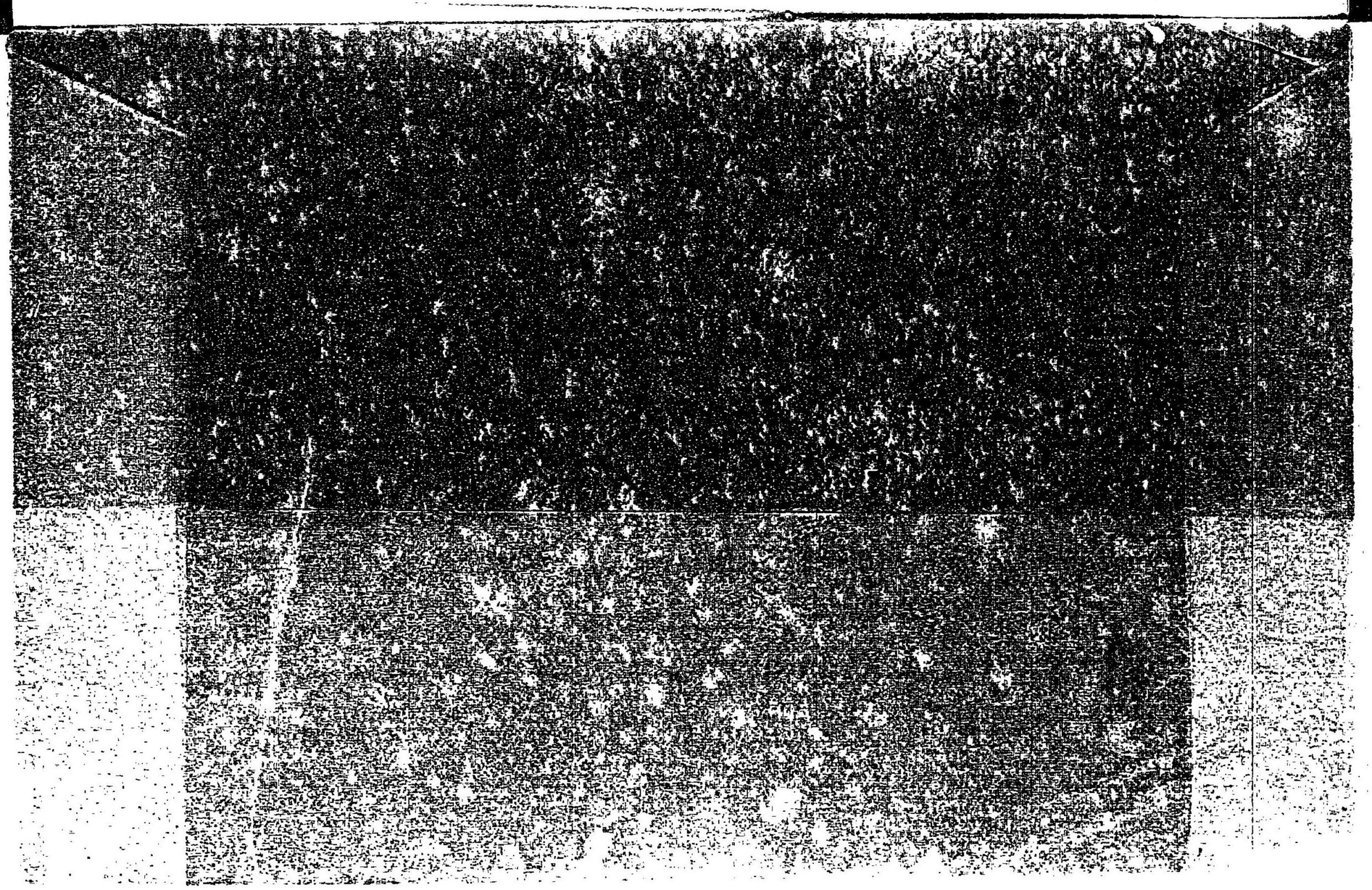
ひ座したる壯佼い足おん其息男路易力査まて年齡二十五六歳風采偉然として威あれども猛からず温和の中ゑ自然厳敏の氣面上ゑ顯れ身には垢染みて光り代帯び縫目の摩れて白みたる敝衣と經ひ見る影も無き打扮あれども天成の美貌愛嬌ゑ正是眞雅僧正の戀たりし在五の君の若盛乎倘然らずば食被の半片の桃を術公ゑ薦めしと聞く彌子瑕の姿態も斯やと思ふ計りある眞菌に一個の美男子おり却て說路易力査は旅寐の間打絶し弁が戀人おる馬理依達ゑ明日は面會をるの機會ありと思ふを以て肚裏又十分の樂をあれば自然と精神爽快ゑ旅の憂さをも打忘ゑ獨元氣ゑ見ゆ

明治十七年十二月十六日御屆
同　十八年四月　　日出版

定價八錢

飜譯人　神奈川縣士族　森澄德聰
四谷坂町百廿二番地

出版人　靜岡縣士族　中村正義
四谷坂町百廿二番地

發兌元　稽古堂
四谷坂町百廿二番地

国立国会図書館